

無 農 薬 の 悲 劇 (II)

宇都宮大学雑草防除研究施設 近内誠登

ま え が き

「衣食足りて礼節を知る」という言葉があるが、今の日本は潤沢な食糧に支えられ、世界一の長寿社会を築いていながら、食べものに不安をつのらせていることは贅沢な嘆げきというよりは、滑稽にみえてくる。

マスコミの無学無律格報道が、農薬諸悪役説を植えつけ、得体の知れない亡霊を信ずるように、まさに作られた農薬不信をかもしている。

さきに無農薬の悲劇としてアメリカから侵入したキハマスゲについて記したが、無農薬の悲劇をあげれば枚挙にいとまがない。それは戦前の農業をみれば瞭然である。病虫害、雑草との闘いに明け暮れ、それでいて生産性が上らず、農村社会の暗黒化と諦観を長い歴史にみることができ。それを可能にしてきた蔭には、農村人口が極めて多く、自給自足に似た農業形体、すなわち農民一人が脩う人間はせいぜい2~3人分で済んだからである。これが20~30人を脩うとなれば話は全くちがってくる。少ない農村人口で全国民の食糧を生産するためには、高度の農業技術が必要である。つまり栽培技術、肥料そして農薬の3本柱によって支えられるものであり、今の日本はこの三要素の構築によって安定収量が成就されたのである。この要素のいずれが崩れても農業が成り立たない仕組みになっている。尤も全国民が自給自足的農業をやると

いうなら話は別だが。

ここで無農薬の悲劇を書こうとした事例は次のようなものである。

最近、堤防や公園に除草剤を散布することに反対する地域住民が少なくない。除草剤は身体に悪いからとか、放任しておくことが自然保護だと信じているらしい。

昭和49年の大雨で

昭和49年秋の大雨で、多摩川（狛江地区）堤防が決壊し、その被害は甚大なものであった。その場所は堰の上流に位置していたが、決壊した一角は住民の反対で建設省が除草剤を散布することができず、雑草が過繁茂状態だったという。決壊後、堤防が修復されて以来、除草剤散布に反対する声がなくなったといわれる。災害や飢饉によって目が醒めるのでは遅いのであって、その回復にはぼう大な経費を投じたものであろう。

本来、堤防は内部の土を固く締めつけ、表面には短小で根はセンイ状をした野芝を張る方法がとられている。これは水の透水性を抑え、表土のエロージョンを防止する護岸対策として長い歴史の中から、経験的実験的に確立した工法である。堤防に生えやすい雑草はアレチノギク、ヒメジョオン、セイタカアワダチソウなどの菊科が多く、次いでススキ、マツヨイグサ、クズ

などである。これらの雑草は地上部も大きくなるが、根部が太く深部まで伸長する習性がある。しかもその根は腐っては新根が生え、生えてはまた腐ることをくり返し、その様な土壌では水が深部まで浸透し、土のゆるみを生じさせ崩壊の原因となる。裸地と雑草発生地で雨水の吸い込み状態の違うことから理解できる。さらに困ることは雑草によって野芝が完全に絶えてしまうことである。

堤防に除草剤を散かせまいとするグループは後を絶たないが、その理由は除草剤はすべて害があり、人間の敵と思っているらしい。農薬開発技術や施用技術は日増しに進歩し、超微量で有効な薬剤が登場している。反対グループの頭脳は、一昔も二昔も前の農薬の一部を問題とし、そこから抜けきれない体質で論じている。

稲作の歴史に学ぶ

もう少しわが国の農業の展開を考えてみよう。

わが国の稲作の歴史は長く、収量を高めようとする技術の開発に終始してきた。有機農法（自然農法）時代から近代化学農法に到達するまでの道程は長く、漸く高位安定収量が得られるようになった。一時代前には稲作りの技術書が溢れ、1kgの増収をはかるために農民は技術を磨いてきた。それらの技術書の主要部分は病害虫対策であり、雑草防除の徹底を説いている。

稲作の歴史を収量の動向でみると、図-1、2（日本の稲作：農水省農蚕園芸局出版：昭和59年）の通りである。この図に示すとおり、時代の推移とともに収量は高まってくるが、その要因として、品種改良があげられる。昔の水稻品種の中心は多収穫品種よりも耐病害虫品種に主眼がおかれており、これこそ無農薬の悲劇そ

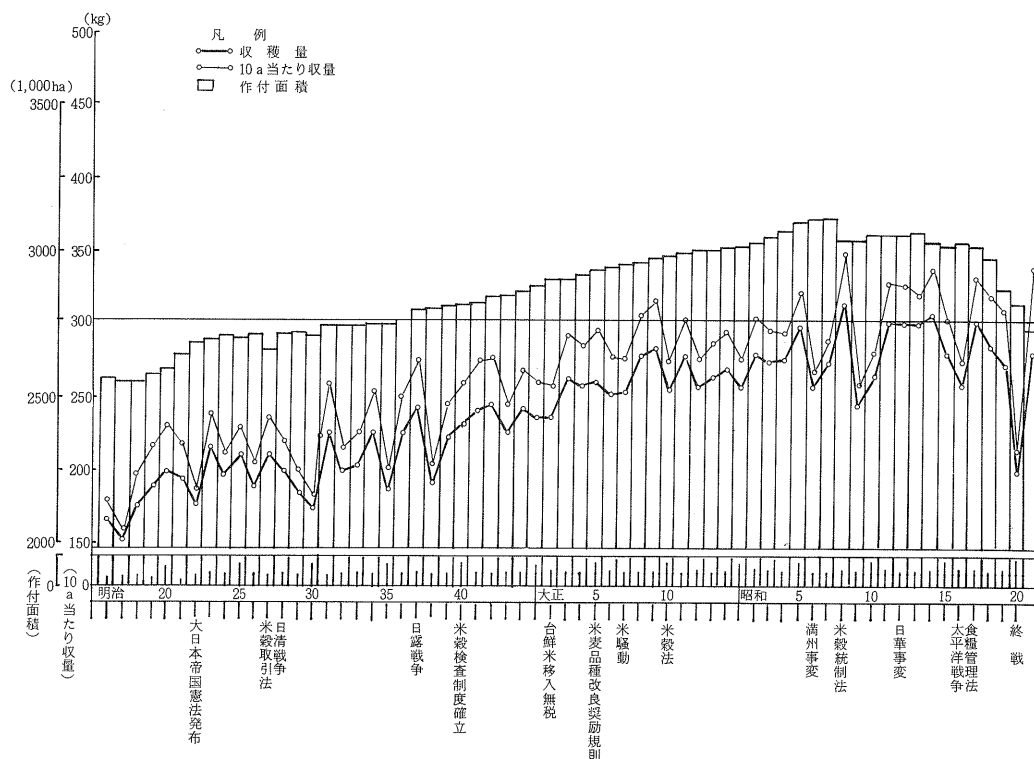


図-1. 水稻収穫量, 10アール当たり収量, 作付面積の動向

